

# 万引き被疑者等に関する実態調査分析報告書 (平成26年度調査)

---

平成28年2月

東京万引き防止官民合同会議



万引き被疑者に関する実態調査結果

第1 調査の概要

1 調査の目的

警視庁では、平成24年4月2日から万引き被疑者等調査システムの運用を開始しており、当システムに入力されたデータを調査分析し、万引き被疑者及び触法少年（以下「万引き被疑者等」という。）の犯行動機、生活状態、犯罪傾向等を恒常的に把握し、万引き被疑者等を取り巻く社会環境等と犯行の関係、犯行を思いとどまる要因等について明らかにし、今後の万引き防止対策に資することを目的とする。

2 万引き事案の現況(平成26年中) 【※数値～警視庁統計に準拠】

(1) 万引き認知・検挙件数及び検挙・補導人員

前年に比べて認知件数、検挙件数、検挙・補導人員が減少している。

検挙・補導人員の占有率では、少年の割合が減少しているのに対し、高齢者の割合が増加しており、万引きの検挙・補導人員は、少年から高齢者へシフトしているといえる。

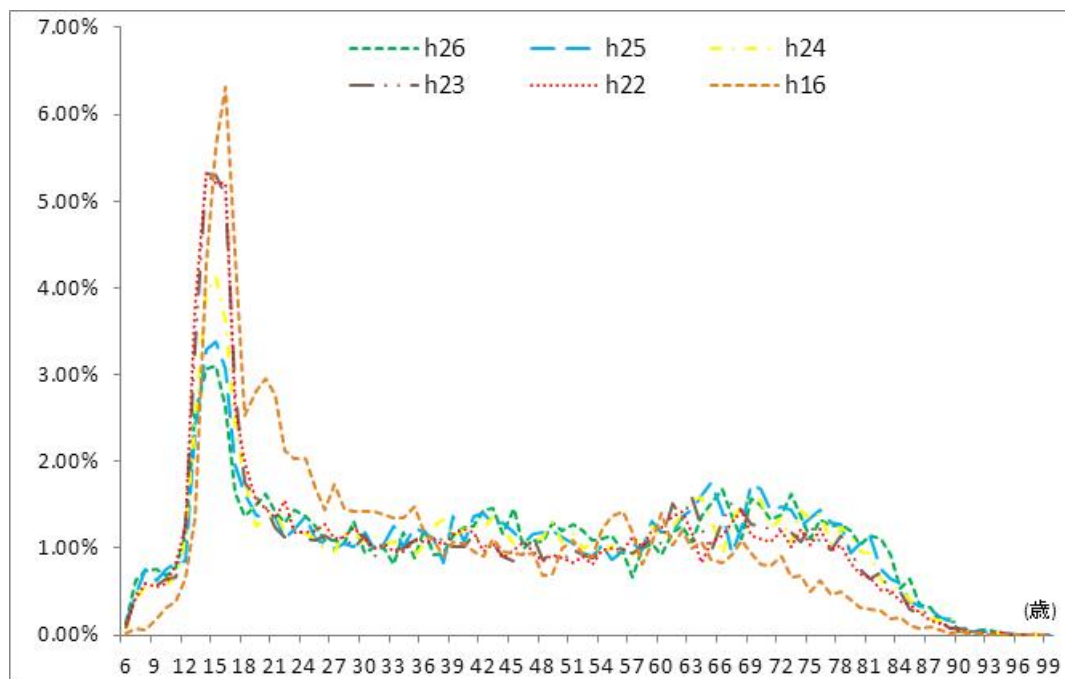
	H26年	H25年	増減	増減率	占有率 (H26年)	占有率 (H25年)
認知件数	15,505	16,043	-538	-3.4%		
検挙件数	9,931	10,582	-651	-6.2%		
検挙・補導人員	10,391	11,382	-991	-8.7%		
少年	2,155	2,442	-287	-11.8%	20.7%	21.5%
小学生	435	443	-8	-1.8%	4.2%	3.9%
中学生	827	899	-72	-8.0%	8.0%	7.9%
高校生	560	732	-172	-23.5%	5.4%	6.4%
大学生	66	87	-21	-24.1%	0.6%	0.8%
その他	87	84	3	3.6%	0.8%	0.7%
有職少年	67	49	18	36.7%	0.6%	0.4%
無職少年	113	148	-35	-23.6%	1.1%	1.3%
成人	5,406	5,915	-509	-8.6%	52.0%	52.0%
高齢者	2,830	3,025	-195	-6.4%	27.2%	26.6%

※本調査における高齢者の年齢定義～65歳以上

## (2) 検挙・補導人員占有率の各歳別比較

平成22年から平成26年までの5年間と平成16年の検挙・補導人員の占有率を年齢別に算出した。

□全体図



- ・ 昨年までの過去5年間と平成16年の比較では、「15歳から35歳」と「65歳以上」において占有率の傾向で特徴に差が見られる。
- ・ 少年は近年、減少傾向が見られるが、他の世代と比較すると占有率は高い。

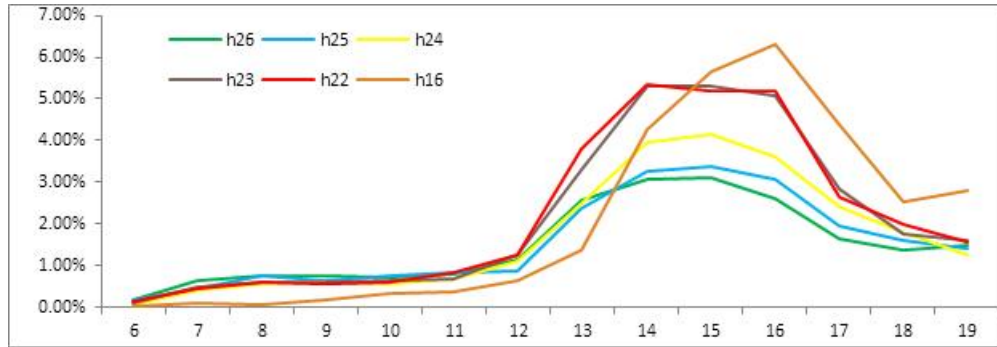
□年齢別上位10傑

	1位	2位	3位	4位	5位	6位	7位	8位	9位	10位
H16	16	15	17	14	20	19	21	18	22	24
H22	14	15	16	13	17	18	19	22	20	68
H23	14	15	16	13	17	18	19	63	67	61
H24	15	14	16	13	17	18	69	64	63	70
H25	15	14	16	13	17	65	69	70	18	64
H26	15	14	16	13	66	17	73	20	69	65

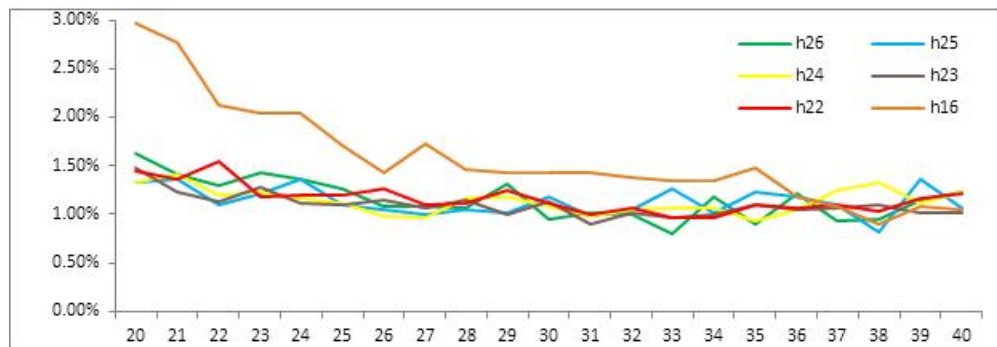
- ・ 平成16年中の占有率上位は、世代別で「成人」「少年」「高齢者」の順であるが、年齢別では「16歳、15歳、17歳、14歳、20歳」の順となっている。
- ・ 平成26年中の占有率上位は、世代別で「成人」「高齢者」「少年」の順であるが、年齢別では「15歳、14歳、16歳、13歳、66歳」の順となっている。

□各歳別詳細

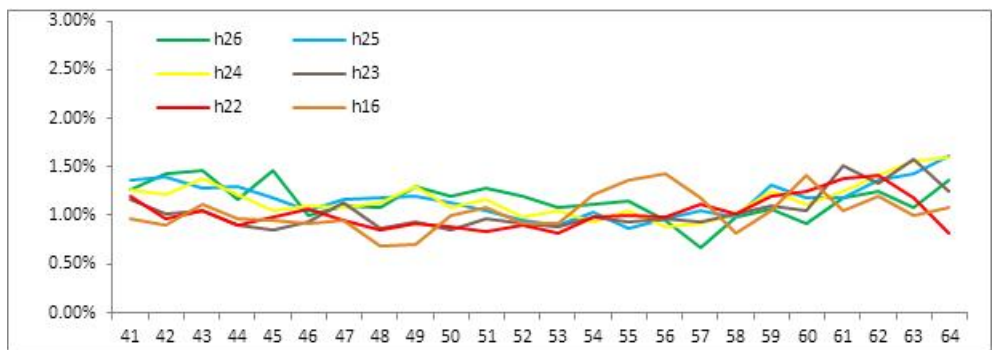
【6歳から19歳】



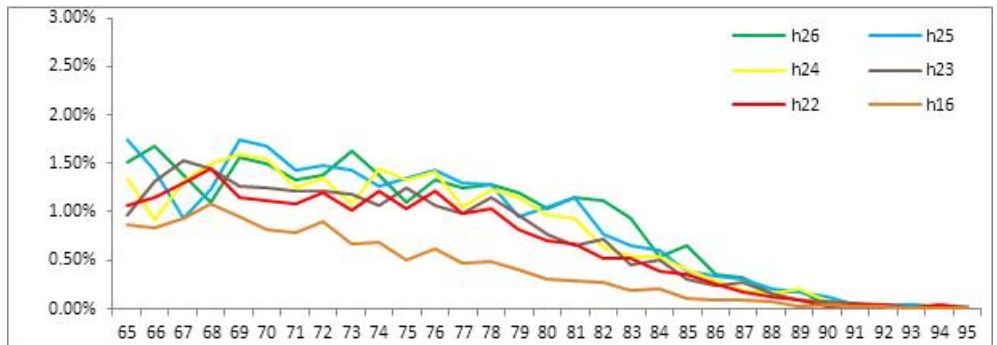
【20歳から40歳】



【41歳から64歳】

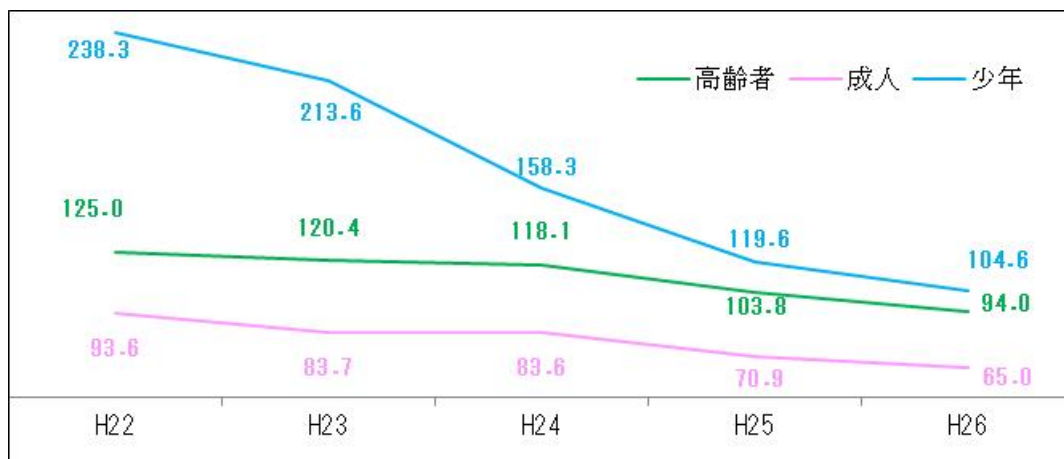


【65歳から95歳】



**(3) 人口比による世代別検挙・補導人員  
(人口10万人あたりの検挙・補導人員)**

人口変動による世代間格差を排除した、世代別検挙・補導人員を検証するため、総務省統計局資料「人口推計」の各年10月1日現在のデータをもとに、世代別人口10万人あたりの検挙・補導人員を算出した。



※人口データ出典「総務省人口推計」

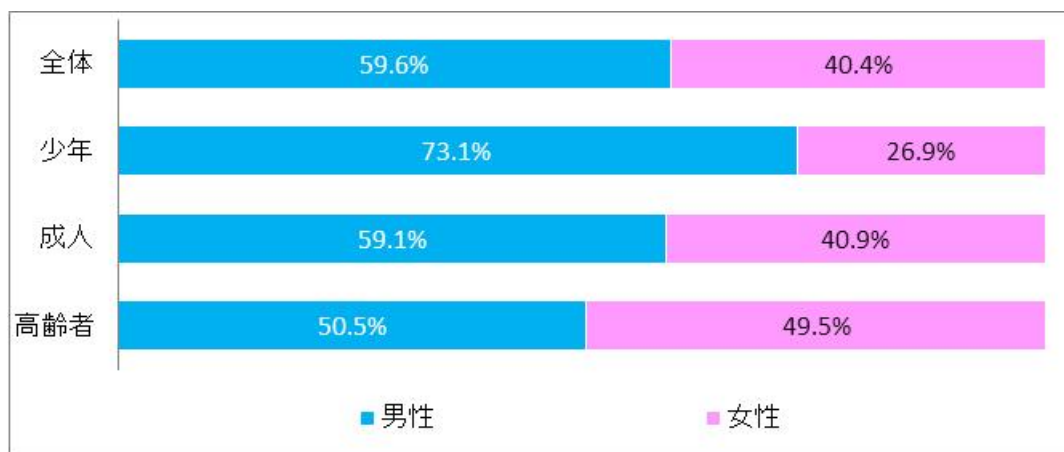
人口比の検挙者数は、少年、高齡者、成人の順に多く、検挙・補導人員占有率と順位形勢が逆転する。(占有率順 成人→高齡者→少年)

また、平成24年以降に高齡者の占有率が少年の占有率を逆転したものの、人口比の検挙者数では、少年が上位に位置している。

近年の推移では、各世代とも減少傾向であるが、特に少年の減少傾向は著しく、世代別上位は変わらないものの、平成22年に少年と高齡者にあった100ポイント(人)以上の差が、平成26年では約10ポイント(人)の差に近接しており、人口比からも高齡者対策は必要であるといえる。

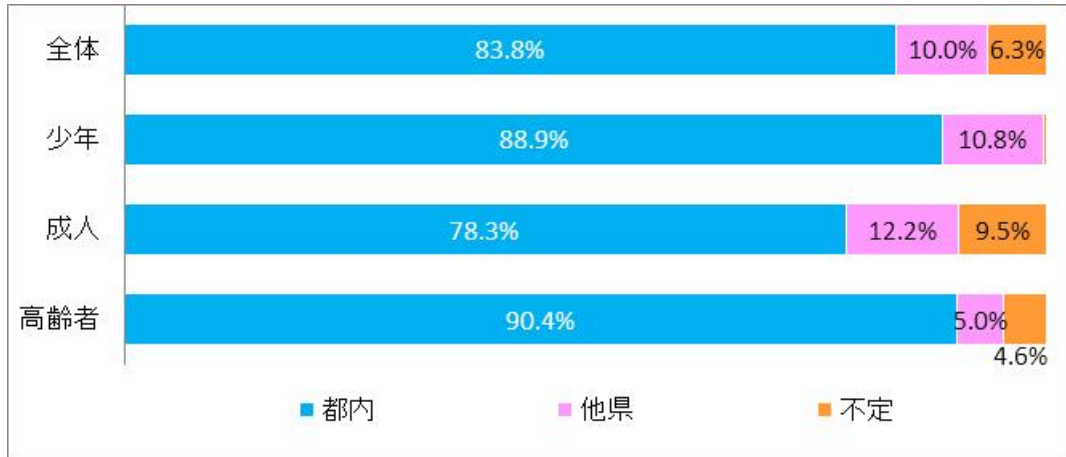
**(4) 検挙・補導人員の男女比**

検挙・補導人員は男性の割合が多い。



**(5) 被疑者(補導を含む)の居住地(都内居住率)**

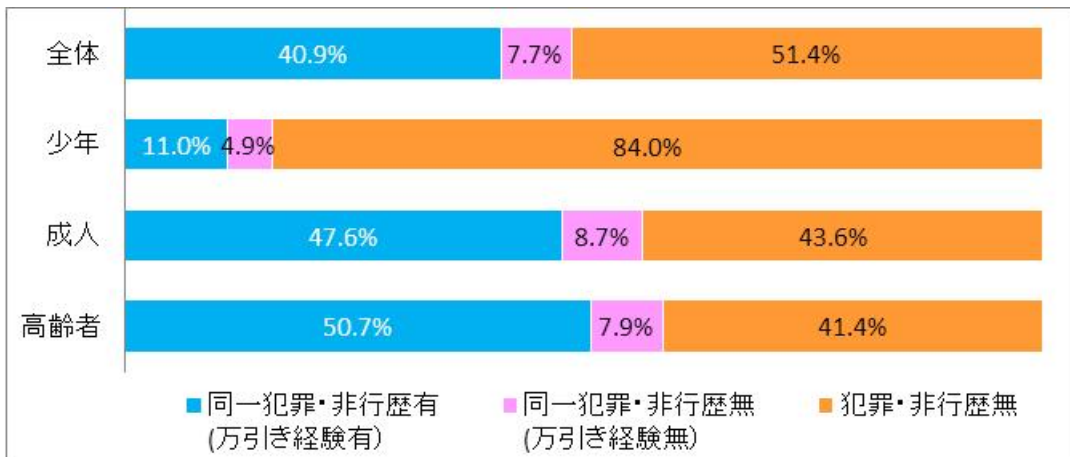
被疑者の約8割が都内で居住者している。



**(6) 犯罪・非行歴の有無**

万引きで検挙された者の約半数が過去における犯罪・非行歴が無い。検挙・補導された少年の約84%が、過去に非行歴が無く、本件犯行が初犯(初めて検挙・補導された)となっている。

成人、高齢者で検挙された者のうち、それぞれの世代における約半数に万引きの犯罪・非行歴を有する者がいる。







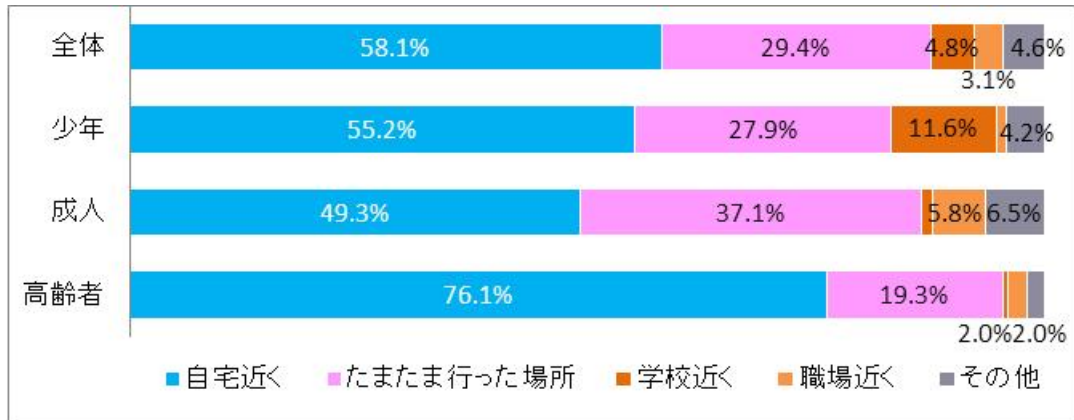




## (2) 犯行地域選定理由

各世代とも「自宅近く」の割合が高い。

(有効回答数、少年 498 件、成人 552 件、高齢者 347 件)



## (3) 犯行場所(店舗)選定理由

各世代とも「店員の数が少ない」の割合が高い。

少年は、「陳列方法」「防犯カメラ設置の有無」が高く、成人、高齢者は「警備員の数」「店員の万引きへの無関心さ」の割合が高い。

(有効回答数、少年 460 件、成人 459 件、高齢者 281 件)

## (4) 被害品

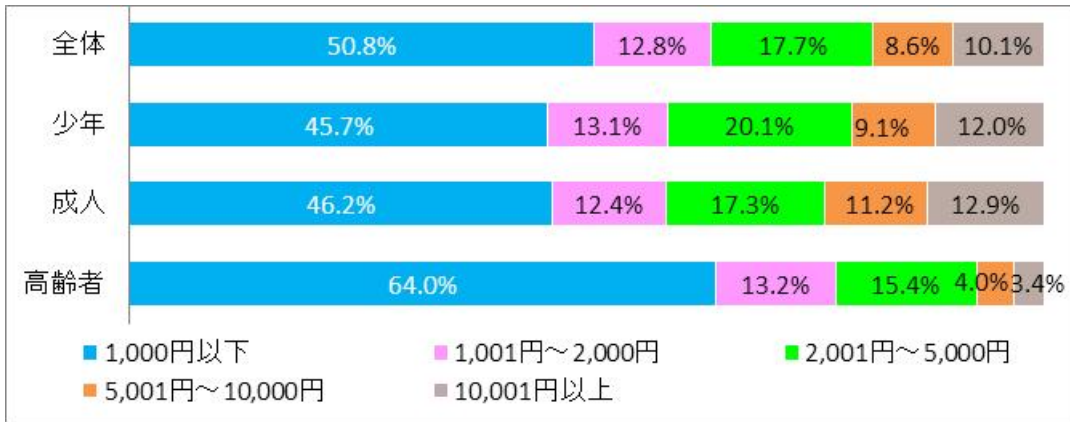
高齢者は「食料品」の割合が高い。

(有効回答数、少年 538 件、成人 607 件、高齢者 387 件)

(5) 被害額

各世代とも「1,000円以下」の割合が高い。

(有効回答数、少年 582 件、成人 780 件、高齢者 494 件)

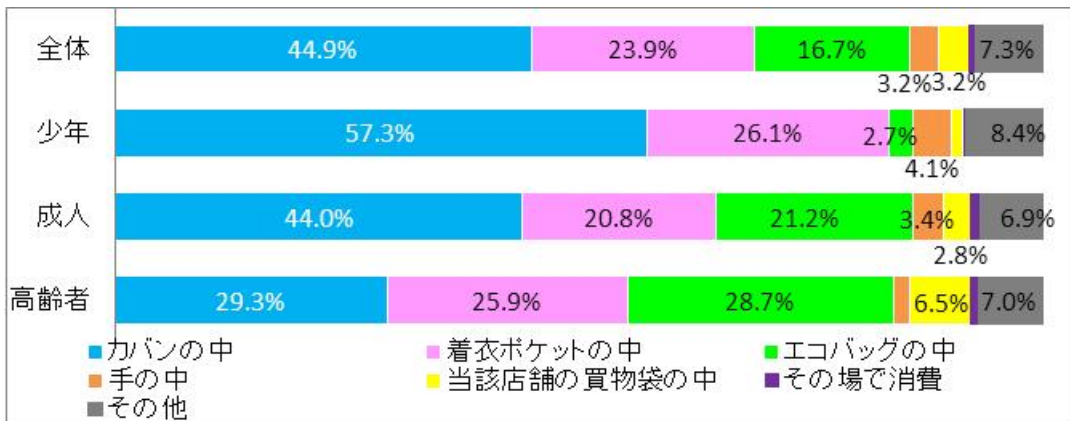


(6) 被害品の隠匿場所

各世代とも「カバンの中」の割合が高い。

高齢者は、他の世代と比較すると「エコバッグ」の割合が高い。

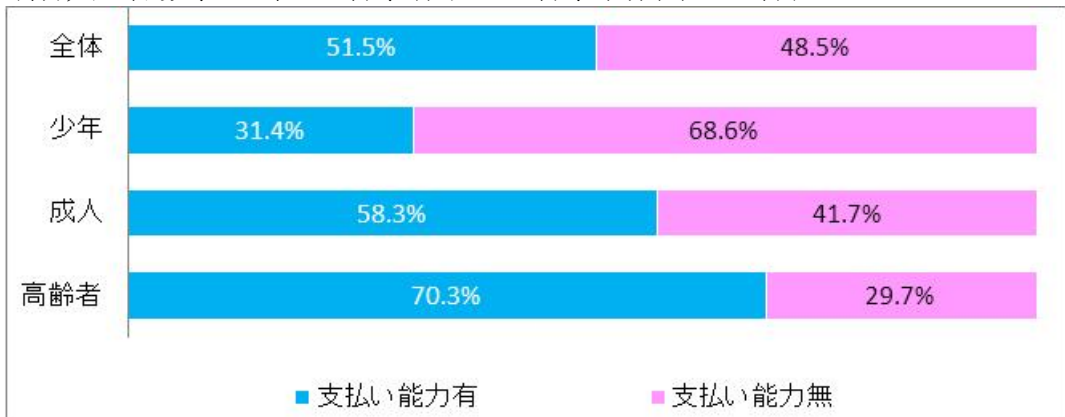
(有効回答数、少年 487 件、成人 562 件、高齢者 355 件)



(7) 支払い能力の有無（検挙時の所持金と被害額を基準に算定）

少年は、「支払い能力無」の割合が高く、成人、高齢者は、「支払い能力有」の割合が高い。

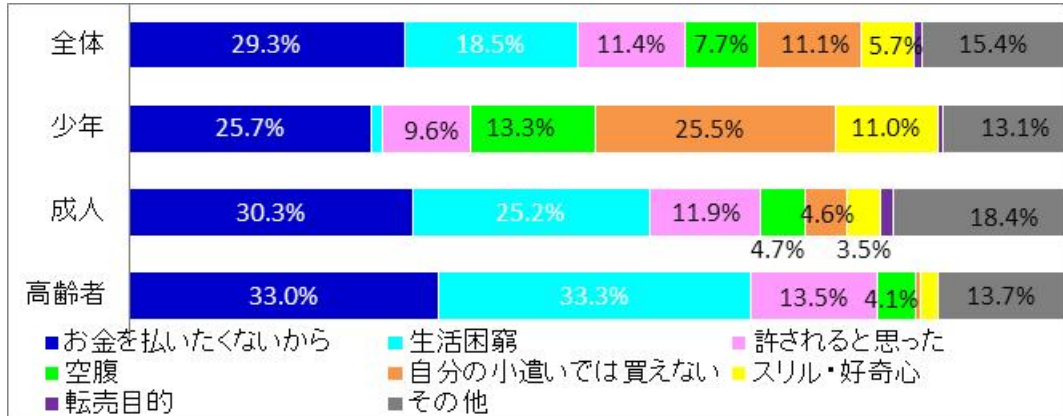
(有効回答数、少年462件、成人494件、高齢者316件)



### 3 被疑者の意識

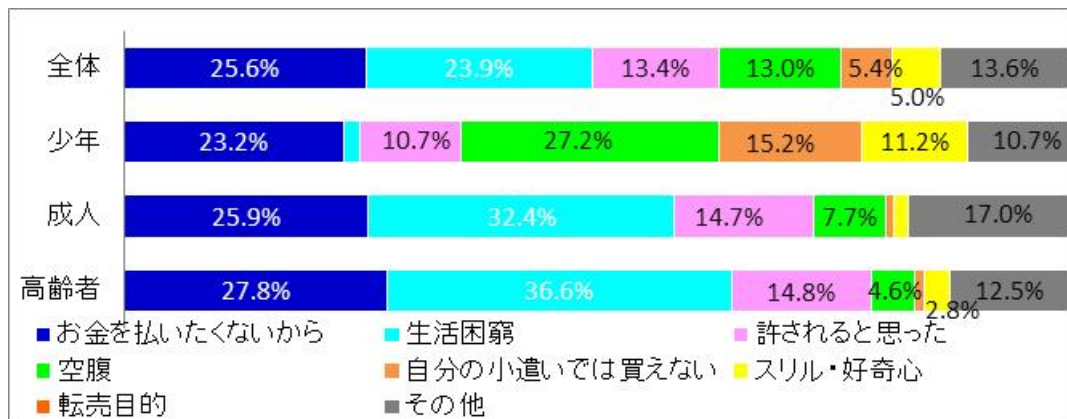
#### (1) 犯行動機・原因

各世代とも「お金を払いたくないから」の割合が高い。  
 (有効回答数、少年502件、成人548件、高齢者342件)



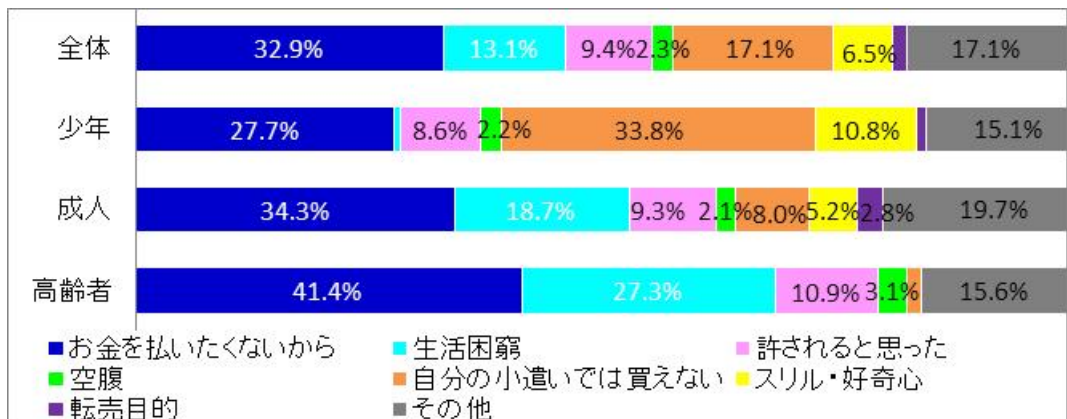
#### (2) 犯行動機・原因 ～ 被害額 1,000 円以下

少年では「空腹」の割合が、成人、高齢者では「生活困窮」「許されると思った」割合が高い。  
 (有効回答数、少年 224 件、成人 259 件、高齢者 216 件)



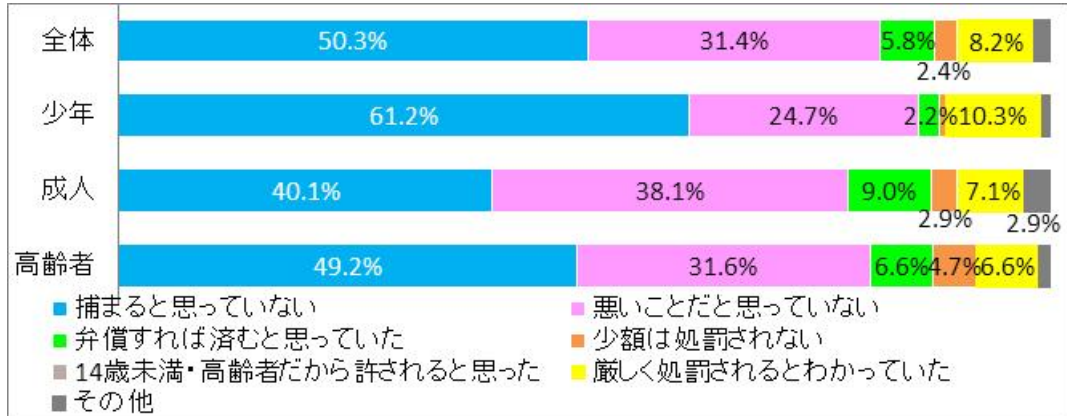
#### (3) 犯行動機・原因 ～ 被害額 1,001 円以上

少年は「自分の小遣いでは買えない」の割合が高く、成人、高齢者は「お金を払いたくないから」の割合が高い。  
 (有効回答数、少年 278 件、成人 289 件、高齢者 128 件)



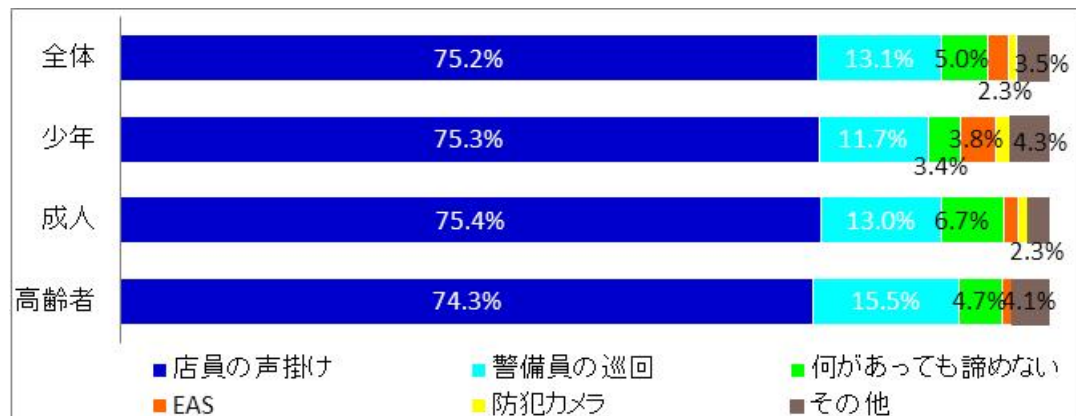
#### (4) 罪の意識

少年は、「捕まると思っていない」割合が、成人は、「悪いことだと思っていない」割合が、高齢者は、「少額は処罰されない」割合が高い。  
 (有効回答数、少年 497 件、成人 491 件、高齢者 301 件)



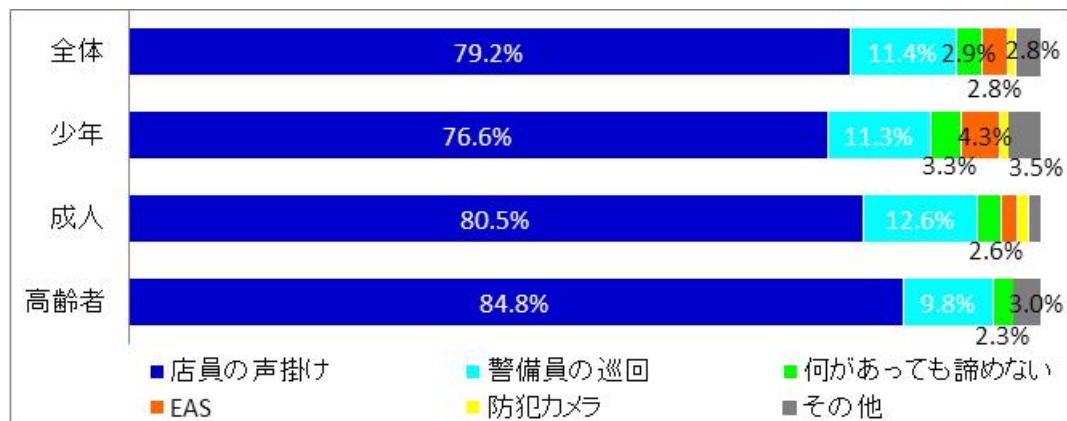
#### (5) 万引きを諦める原因

各世代とも「店員の声掛け」、「警備員の巡回」の順に割合が高い。  
 (有効回答数、少年 469 件、成人 476 件、高齢者 296 件)



#### (6) 万引きの初犯・再犯別、万引きを諦める原因 ～ 初犯

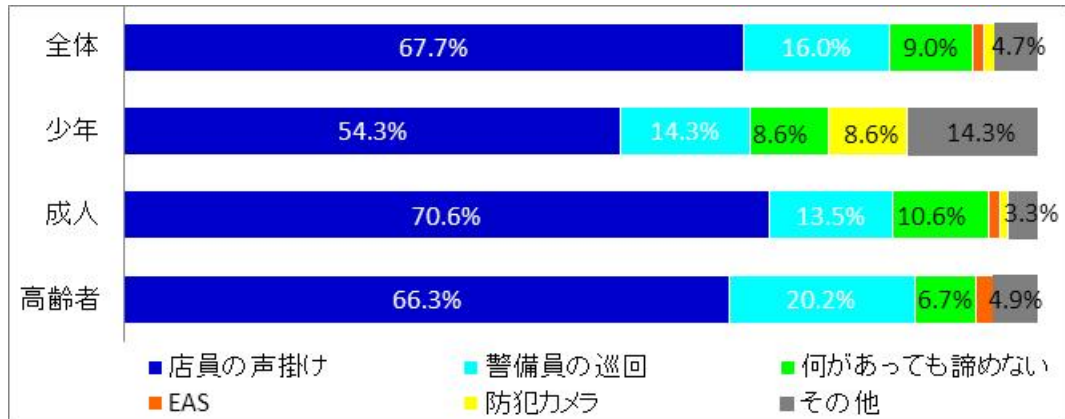
各世代とも再犯者に比べ「店員の声掛け」の割合が高く、特に高齢者にその傾向が顕著である。  
 (有効回答数、少年 397 件、成人 231 件、高齢者 132 件)



(7) 万引きの初犯・再犯別、万引きを諦める原因 ～ 再犯

各世代とも初犯に比べ「警備員の巡回」の割合が高く、特に高齢者にその傾向が顕著である。

(有効回答数、少年 40 件、成人 401 件、高齢者 285 件)

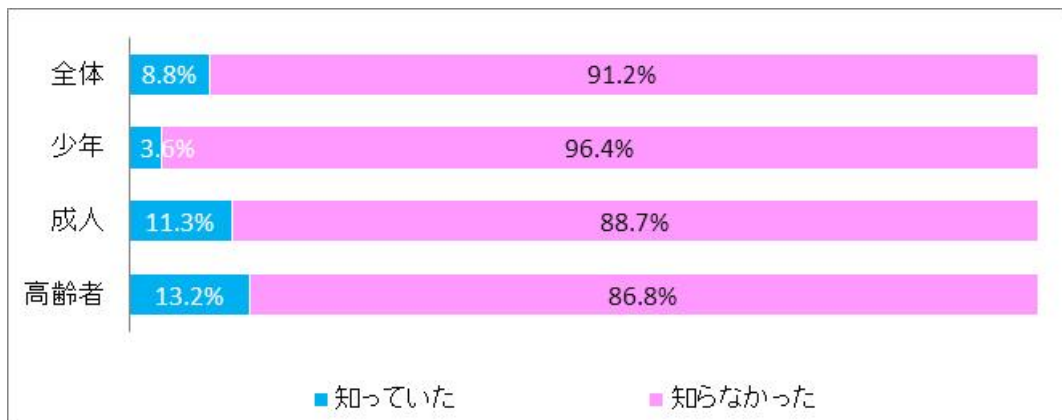


4 被疑者の万引きに対する知識

(1) 万引き全件届出の知識の有無

各世代とも「知らなかった」割合が高い。

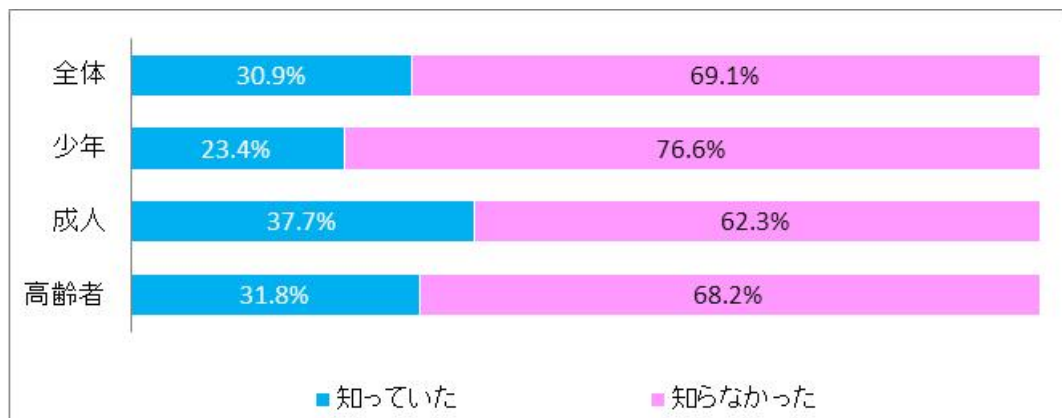
(有効回答数、少年 474 件、成人 485 件、高齢者 305 件)



(2) 万引きの刑罰の知識の有無

各世代とも「知らなかった」割合が高い。

(有効回答数、少年 470 件、成人 461 件、高齢者 288 件)



## (2) 今後の課題

本分析ではさまざまな知見が得られたが、使用したデータの質は充分とはいえず、その精度にはいくつかの課題があった。

もっとも目立ったのは、データが入力されていない欠測値が多い項目が少なくなかった点である。たとえば「収入」は9割、「年金受給の有無」「生活保護の有無」は5割以上、「万引きを諦める要因」「犯行場所選択理由」「罪の意識」「逮捕の理由」などは3割以上が欠測値であった。欠測値が多いと、今回のような分析にその項目を使用できないというだけでなく、各項目の単純集計の意味すら薄れてしまう。

欠測値を減らすには、入力者が迷わず簡単にデータ入力できるよう工夫する必要がある。たとえば、以下のような改善方法が考えられる。

- 選択肢の数を少なくする。(ほとんど選ばれない選択肢は削除、ほぼ同じ意味の選択肢は複数を一つに統合、など。)
- 設問によっては、「その他」以外に「非該当」という選択肢を用意する。(たとえば「年金受給の有無」などは、該当年齢以外は自動的に「非該当」が選ばれるようにできるとよい。)
- 1つの選択肢しか選べない単独回答設問なのに、複数の選択肢を同時に選んでも何ら矛盾がない設問もあったが、これは設問設計上、基本的に問題がある。このような場合は、選択肢各々を各1問の単独回答設問に分解する。(選択肢は「あてはまる」～「あてはまらない」などの段階尺度が望ましい。)
- 調査項目の数自体を少なくする。

また、数値を入力する項目についてもデータの精度に疑問が残った。たとえば「犯行時の所持金」は、「2円」「284円」「10,224円」など細かい数字まで入力されているものが多い一方で、「1,000円」「10,000円」などきりの良い数字になると極端に度数が多くなる。これは実態を正確に表している可能性もあるが、入力者による感覚の違いという可能性を疑うのは自然である。もし1円単位までの正確な数字が必ずしも必要でなければ、数値を入力する欄とするより、「100円未満(欠測値を除いて18.6%とかなりのボリュームである)」「100円以上1,000円未満」などの選択肢を選ぶ単独回答設問とした方が、入力の負荷が軽減されると同時に、入力者による差が入り込む余地が減り、データの信頼性が高くなるのではないか。しかもこのように改善した設問で得られるデータは、集計・分析がより容易で扱いやすいデータである。なお、正確な数値の入力欄(分かった場合のみ入力。参考数値)と、選択肢を選ぶ単独回答設問(必須入力)の2つを用意するのもよい方法である。



入力者の負荷軽減という意味では、データ数そのものを減らすことも考えられる。欠測値が多く信頼性に疑問があるデータが多数あるよりも、たとえ少数であっても、信頼できる精度の高いデータの方が得られる知見は多い。

なお、現状は、各警察署にて毎月決まった数のデータをとりまとめることになっているが、たとえば、検挙人数やその内訳に応じたデータ数とすることができればその方がよい。そうなれば、データは万引き被疑者意識の一つの縮図と考えることができ、より利用価値が高くなる。

万引き被疑者等に関する実態調査は、万引き被疑者の犯行動機や犯行選択理由等を知り今後の防止対策を検討する上で、なくてはならない貴重な調査である。今後、この調査がより有用なものとなるよう、適切な改善がなされることが望まれる。

# 万引き被疑者等に関する実態調査分析報告書

(平成26年度調査)

平成28年2月印刷

「東京万引き防止官民合同会議」事務局

〒100-8929

東京都千代田区霞が関2丁目1番1号

警視庁生活安全部 生活安全総務課 生活安全対策第三係

電話 03-3581-4321 (警視庁代表)

警視庁HP <http://www.Keishicho.metro.tokyo.jp/>

